公開シンポジウムA

1日目（11月15日）13:30～16:30
場所：交流センター多目的ホール

自殺・自傷の問題をどのように捉えていけばよいか
- 若年層の実情を中心に -

企　　画	九州心理学会第75回大会運営委員会		
司　　会	川瀬	隆千	（宮崎公立大学人文学部）
話題提供	川平	敬子#	（宮崎市保健所　健康支援課）
	後藤	大士	（医療法人一誠会　都城新生病院）
	後藤	幾子#	（NPO法人チャイルドラインみやざき）
	初鹿野	聡#	（NPO法人ハートム）
指定討論	内野	悌司#	（広島大学 保健管理センター）

［# ：非会員］

企画趣旨

私たちは，自殺・自傷の問題をどのように捉えていけばよいでしょうか。平成10年以降の自殺者数は，年間約3万人と欧米諸国と比較しても高い水準にあり、日本の「自殺」が深刻な事態であるということは周知のことと思います。宮崎県でも，人口10万人あたりの自殺者数（自殺死亡率）は，全国で高い位置にあります。

全国の年代別自殺死亡率の推移をみると，他の年齢層では減少傾向がみられるなか，若年層（10-30代）では，増加傾向がみられます。また，平成23年度の死因の年代別順位では，10代後半は，1位「不慮の事故」2位「自殺」，20-30代では，1位「自殺」2位「不慮の事故」という結果が示され，改めて衝撃を受けます。こうした背景から，国は，平成24年の自殺総合対策大綱の見直しの際，特に，若年層への取り組みの必要性・重要性を大きく取り上げました。また，大綱では，年代など，対象ごとの実態を踏まえた対策を推進していますが，若年層の場合，避けて通れないのが『自傷』の問題です。『自殺未遂歴・自傷行為』が，将来的な自殺のリスクを高めることがわかってきたことからも，周囲の適切な理解とケアが求められます。

ここ10年の自殺者数だけを考えても，国民の100人に1人は大切な人を自殺で亡くしていると想定され，『自殺未遂・自傷行為』者・関係者においては，もっと広がっていると考えられます。これに対し，一般には，「どうかかわってよいか，わからない」等の戸惑いの心情や，どこか「寝た子を起こすな」という雰囲気があり，実情とのズレが感じられます。ここでは，若年層の『自殺・自傷』の実情と各関係者の取り組みについて話題提供をしてもらい，私たちは何ができるのか，意見交換を通して考えていきたいと思います。

公開シンポジウムB

２日目（11 月 16 日）13:30～16:30
場所：交流センター多目的ホール

宮崎のペアレント・トレーニングの展開と今後

企　　画	九州心理学会第 75 回大会運営委員会	
司　　会	立元　真	（宮崎大学教育文化学部）
話題提供	黒田 奈々#	（NPO 法人ドロップインセンター）
	原田　和代#	（NPO 法人ドロップインセンター）
	福島 裕子#	（宮崎大学教育文化学部付属幼稚園）
	立元　真	（宮崎大学教育文化学部）
指定討論	福田 恭介	（福岡県立大学人間社会学部）

［# ：非会員］

企画趣旨

経済の好・不調，税制や雇用の変化，子育てに関するあるいは直接には関係しない文化や価値観の変容，また，核家族化の中で孤立した子育ての増加などのさまざまな時代背景が変動しています。また，この 20 年で発達障害に関する知見は一般に広がりつつあるものの，具体的な支援のシステムや技術の普及はまだ十分ではありません。子どもの虐待の通報件数も減少に転ずるにはまだ至っていません。資源が少なく，減少してしまった子どもの育ちに未来を託すしかない我が国では，先行して研究開発が行われてきた欧米の諸国に遅れながらも，子育て中の子どもの親を中心として，子育ての技術面支援するペアレント・トレーニングの研究と普及が進み始めています。

そうしたなかで，宮崎県では，“Nobody’s perfect”（ドロップインセンター），“コモンセンスペアレント・トレーニング”（ドロップインセンター），幼児版・幼保小連携版・小学生版の“はなまるプロジェクト”プログラム（宮崎大学ほか）が展開されています。そして，人口の少ない宮崎県での普及は，むしろ全国をリードする形になりつつあります。

今回のシンポジウムでは，これらのプログラムの概要から，実践の展開過程とその成果を，参加者とともに検討していきます。これらのプログラムの成果をどう測り，どう評価していくのか？　また，今後どのような展開が期待され，そのためにはどういった要件が必要なのかを整理し，今後の宮崎での活動実践をさらに発展をさせていくきっかけとしたいと考えております。